



第1回 大河ドラマ「風林火山」をめぐって 平成18年9月19日
講師/佐倉一徳さん NHK長野放送局企画総務部副部長
樋口 博さん 長野市産業振興部観光課課長

第2回 もっと楽しくて、元気な街づくりを 平成18年10月23日
講師/久米えみさん ながのクラッセ会長
樋口敦子さん ながのまちづくりカフェメンバー

第3回 スポーツによる街づくりを 平成18年11月21日
講師/鷲沢幸一さん アスレながの事務局長
室賀 豊さん 長野市アイスホッケー協会理事

第4回 写真で見る長野の街並み 平成19年1月23日
講師/清水隆史さん フォトグラファーほか
常盤昭二さん CMディレクター

●わいがやサロンスペシャル
スポーツによるコミュニティ再生 平成19年2月22日
講師/二宮 清純さん スポーツジャーナリスト

第5回 健康と美容を保つために 平成19年3月22日
講師/虎羽里(トラバリ)ゼーラさん アーユルヴェーダ・健康セラピスト

第6回 環境と街づくり
ばていお大門・TOiGOの設計に参画して 平成19年4月23日
講師/竜野泰一さん 株式会社エーシーエ設計 取締役副社長 [一級建築士]

第7回 信濃グランセローズの挑戦 平成19年5月21日
講師/木田 勇さん 信濃グランセローズ監督

第8回 スポーツマンシップの大切さ 平成19年8月29日
講師/荻原健司さん 参議院議員・五輪金メダリスト

第9回 トウガラシの尽きせぬ魅力/
「農」による地域活性を探る 平成19年10月24日
講師/松島憲一さん 信州大学大学院農学研究科 准教授

第10回 命のバトンを渡す「ピオトーブ」/
長野市をピオトーブネットワークシティに 平成19年11月14日
講師/松岡保正さん 国立長野工業高等専門学校 環境都市工学科教授

●わいがやサロンスペシャル
長野・考/長野の明日を話そう 平成20年2月14日
講師/中馬清福さん 信濃毎日新聞主筆

第11回 簡単・おいしい・オシャレ/わたしのレシピができるまで 平成20年3月26日
講師/浜このみさん クッキング・コーディネーター

第12回 あなたのからだは「築何年」ですか? 平成20年7月14日
講師/角本浩二さん バランスアドバイザー 長野県健康管理士会会長

第13回 アメリカ生活で感じたあれこれ
—変化に対して前向きになることの大切さ— 平成20年8月19日
講師/針谷友久さん 東京中小企業投資育成株式会社 主任(長野県担当)

第14回 市役所第一庁舎及び長野市民会館の在り方を考える
平成20年9月16日
講師/水野守也さん 長野市総務部次長 兼庶務課長

第15回 長野パルセイロ —優勝報告&JFL昇格への挑戦 平成20年10月29日
講師/パドゥ・ピエイラ監督、薩川了洋コーチ、貞富信宏キャプテン

第16回 農業再生とブランド化 平成20年12月3日
講師/町田良夫さん 社団法人長野市農業公社 常務理事

第17回 地上の楽園は馬の背にあり 平成21年2月18日
講師/中山 修さん 中山法律事務所 弁護士

第18回 循環備蓄型の農業の実践
—宇宙のリズムにあった農業で一次産業の再生を試みる— 平成21年6月3日
講師/塩澤研一さん (財)いのちの森文化財団副理事長 (株)水輪ナチュラルファーム代表取締役

第19回 郷土を包む「おやき」 平成21年7月14日
講師/小出陽子さん (同)ふきっ子のお八起 代表/信州おやきブランド化委員会 研究会リーダー

第20回 信州の伝統から生まれる食文化
—漬物の新しい風— 平成21年9月2日
講師/宮城恵美子さん (有)宮城商店専務取締役/木の花屋

第21回 飯綱高原を、もっと住みよく、おもしろく! 平成21年11月24日
講師/志村雅由さん NPO法人 飯綱高原よっこらしよ/代表理事

第22回 JFL昇格に向けて 平成22年3月17日
講師/薩川了洋さん AC長野パルセイロ新監督

第23回 先人の知恵を受け継ぐ〜トチの実、雑穀、あんぼ〜 平成22年5月25日
講師/石沢一男さん (有)田舎工房 代表取締役

第24回 3度目でつかんだオリンピック出場 平成22年7月28日
講師/新谷志保美さん バンカーバーオリンピック代表 (株)竹村製作所 勤務

第25回 逃げないスケルトン ～夢と感動と勇気を～ 平成22年9月15日
講師/越 和宏さん スケルトン競技3大会オリンピック日本代表 (株)システックス所属

第26回 Go to J へ、長野に —いよいよ地域決勝大会!〜 平成22年10月25日
講師/鈴木政一さん 長野パルセイロ・アスレチッククラブ強化本部長

第27回 グランドデザインの視点で「信州の食」を考える 平成22年11月30日
講師/千村尚司さん 千村ブレイン代表 ソムリエ

第28回 ご利益のある町づくり 平成23年1月26日
講師/川崎史郎さん フリーライター「アクティブ」主宰

第29回 防災と危機管理 平成23年6月1日
講師/安藤長一さん 篠ノ井消防署署長、緊急消防援助隊長長野県隊長(第二次派遣隊)



NUPRI
Nagano Urban Policy Research Institute
NPO 法人 長野都市経営研究所

〒380-0834 長野市大字鶴賀問御所町1289-1丸本ビル2F
TEL.026-235-7911 FAX.026-235-6166
www.nupri.or.jp
e-mail:nupri@nupri.or.jp

わいがや サロン

通信

Vol. 30
2011.9



世界に誇れる大らかな寺「善光寺」門前町である長野市

第30回 江戸のエコロジスト 一茶

平成23年8月30日(火) 18:00~20:15

講師/マブソン青眼さん 俳人・比較文学者

■座長 岩野 彰 場所/NUPRI事務所 TEL.026-235-7911

2011年晩夏のわいがやサロンは、フランス人にして俳人・長野市在住の比較文学者、マブソン青眼さんをお招きして、一茶がさし示してくれた人間と自然の関係、長野市への提言をお話いただきました。

東京と松本の大学で比較文学、フランス文学を教えますが、長野の空気を吸っていたいから長野市に住んでいます。今日の演題である一茶は木を尊敬していました。住まいに後町を選んだ理由も後町小学校の木=桜やメタセコイヤに魅せられ、娘に木を見せて育てたいと思ったからです。

長野市の3つの財産、善光寺・一茶・長野オリンピック

長野に16年暮らして思うのは、この町には世界に誇れる財産が3つあるということです。

1つめの財産：善光寺。無宗派(2宗派で守護)・男女貴賤差別なく、すべての人を受け入れてきた歴史——こんなに大らかで開放的な寺院は世界にありません。聖徳太子が手紙を送ったという話がありますが、これは法隆寺が善光寺を支配下に置こうとしたということではないでしょうか。中央(為政者)の仏教とは明らかに違う大らかさがあるのは、中央仏教より古いから(!?)。「さすが」と思ったのは、北京オリンピック聖火リレーのスタート地点を断った件。弱者の立場に立った考え方を貫いていました。その門前町として1400年以上営んできた長野——信州人は堅いとよく言いますが、実は大らかだということの証でしょう。

2つめの財産：一茶。長野県人で、世界で一番有名なのは一茶です。日本の俳文学界では、一に芭蕉、二に蕪村、三に一茶。しかし、多くの人によく読まれているのは一茶なのです。なぜか?それはヒューマニズム=人間らしさ、を感じるからです。ヨーロッパの人々は偶像化するのではなく、人間そのものを知りたいがります。

3つめの財産はオリンピックです。他の二つに比べれば浅いかも知れませんが、世界中の人がNAGANO=冬季オリンピック、世界で一番大きなスポーツイベントが行われた町だと覚えています。

そんな長野へ観光に来てもらいたいですよね。でも善光寺に歩いて行くのに、一休みできる場所がない。表参道の中間点にハイパークやセントラルパークのような、緑を上手に使った広い公園があればなあ、ゆったりと観光でき、憩いの場になるのになあ(オリンピックの冠を付す。一茶を記念したものでなくても、木を愛する点で結びつきます)。ご検討ください。



まぶそん・せいがん (Laurent MABESONE) 1968年フランス生まれ。俳人・比較文学者(十文字学園女子大学・信大非常勤講師)。高校生のとき、交換留学生として宇都宮市へ。96~99年、長野オリンピック仏語要員として長野市に居住。その後も長野に留まりたく、国費留学生として早稲田大学大学院教育学研究科にて博士号取得。長野市在住



俳句愛好者、八十二文化財団職員なども聴講に来てくれました

ひねくれても無理はない半生

善光寺と一茶は似ています。ローカルでありながら、よく知られ、大らか。でもひねくれ一茶とも称されています。大らかになったのは晩年になってからなんです。

皆さんご存知のように一茶は奥信濃・柏原の人。中ぐらいより上の本百姓・小林弥五兵衛の長男弥太郎として生まれましたが、4歳で母親が亡くなり、継母が来ます。寺子屋に行きたいのに農作業や義弟の世話をやらされた。4歳といえば一番デリケートな年頃、継母になつかず、仁ノ倉にいる母方の祖母だけが味方でした。けれども祖母が亡くなった14歳、父から江戸へ奉公に出るよう言い渡されます(長男なのに!!)。

空白の十数年を経て、今の千葉県・馬橋、働き口の旦那さんが「句会にも出ていいよ」と言ってくれた。そこでとことん勉強、もともと賢かったから皆の知らないことも知っている。28歳で葛飾派頭領溝口素丸の執筆(No.2)になり、その後同派竹阿の庵号を継げるまでになる。ところが弟子が見つからない。なぜか?身分が百姓だったからです。

全国を俳句行脚して歩き、句集も出すが悶々とする日々の39歳(フランス革命の頃です)、父がチフスにかかり看病します。亡くなる前、「田畑・家の半分をお前に渡す。それで我慢してくれ」と言い残します(証拠として『父の終焉日記』を記す)が、相続交渉は難航し、和解がなったのは一茶50歳を越して後——それから心の変化があったのです。

ひなみやび 鄙びと雅の混交

声を出して読んでください(詩は万国、声に出してこそ心に響くものです)。

ねがはくば松に生てぬく——とかぶつて寝たき峰の白雲

これはまだ相続和解成立前、江戸で俳諧師としてやっていくことを断念し、帰郷する旅の途中で詠んだもの(西行の本歌どり)。木は、冬は伸びないで夏伸びる、ゆっくりと無理しないでバランスをとっている生き物——そんな木を愛する気持ちが一茶にありました。ベートーヴェン(一茶と同じ年に没)「我は一人の人間よりも一本の木の方が好きだ」

かるた程門のなの花咲にけり

菜種油を自作し、自立している田舎を一茶は見直した(私の出身地ノルマンディーの市バスは地元産の菜種油で走っています)。そもそも農村地帯に住む人間は万物に魂が存在するという信条=アニミズム→共生する生き物感覚がある。そこに一茶は気付いた。晩年の一茶は、俳文学史上初のエコロジストなんです。

うつくしやせうじの穴の天河

帰郷して半年目の大ピンチ、伝染病に罹ってしまいます。75日間の病床を提供してくれたのは実家でも柏原近隣家でもなく善光寺町の門人・上原文路。回復してから、一茶は信州を肯定して見るように変化し、物質的な豊かさよりも大自然=鄙びの文化こそ尊い、と思うようになります。破れた障子(鄙)と天の川(雅)を同等に扱ったことが新しい!私は、「鄙び」と「雅」の混交が一茶の真骨頂だと思います。

孤立したヒトでなく人間的(Humanus)であれ

一茶は家族を得ることにこだわりました。52歳で結婚し、三男一女を授かるも、いずれも幼年期のうちに死に、妻も病死します。64歳で再三婚した翌年、せつかく持てた家が柏原の大火で類焼し、土蔵の寒さと中風(酒も飲みたくなるというものです)のため世界。しかし実は奥さんのお腹には赤ちゃんがいたのです!(弥太郎にちなんで「やた」と名付けられました)

そんなわけで今、柏原には一茶の子孫がたくさんいます。彼は生命を称える俳人でした。そして決して諦めない人間でした。

「3・11の事故後も、一茶を愛するから、私は長野に住み続け、気を付けながら娘を育てていく。もっと物事を長期的に見て、木を大事にしましょう。放射性物質を含む、様々な廃棄物を残すような生き方はやめましょう」という言葉で講演を結ばれました。